

編集室から

今月号から、執筆陣が3年8ヶ月前に戻りました！

ご事情でお休みをされていた東北の上村さんが、復帰していただくこととなりました。以前の通り、福井の江川さんと隔月で、ご担当頂くこととなります。復帰に当たり、上村さんから次のメッセージを頂いています。

「2015年12月発行アスリックニュース vol.178の『きただより71』以来、濱さん、江川さんのご配慮により、上村の執筆が3年8か月ぶりに復活することになりました。このページの担当は以前のように奇数月が江川さん、偶数月が上村となります。改めてよろしく願いいたします。」

上村さん・江川さん・小生の3名は、かつて地方シンクタンク協議会に所属していたシンクタンクの職員というご縁で、互いに刺激しあいながら、それぞれの調査・研究にいそしむ関係でした。

上村さんとの出会いは、はっきりと覚えています。半島振興法の制定周年記念として、和歌山県で開かれた一連のシンポジウムにご一緒させて頂きました。招聘を受けた我々は、打合せを兼ねて前泊したとき、ホテルの同室でした。その場から早速議論を交わして翌日に臨んだと記憶しています。

それ以来、何かと情報交換をする仲となり、東北でご活躍の方々を紹介して頂き、大いに視界が広がりました。

上村さんは、ザ東北人とも言うべき方で、朴訥とした雰囲気・語り口ながら、言うべきところはキチンと押さえて語られる、そのスタイルは一貫してぶれない事に敬意を表しています。

そんな上村さんの復帰が個人的にも大変嬉しく、どうぞみなさま、よろしく願い申し上げます。(は)



のと
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち
03-5537-3078
17:00～23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27
プラーザ銀座ビル地下1階
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2019/08
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>
〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

2019/08
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

景 月



和歌山県有田市にて
by hama

肝臓がブドウ糖を蓄えるダムの役割を果たし、その水門を調節するのがインスリンという話に戻ります。図をご覧ください。少々複雑で申し訳ありませんが、？の番号に沿って説明します。

以前も述べましたが、炭水化物は数百個から数万個のブドウ糖が所々で枝分かれしながら鎖状に連なって出来ています。それが口から入って十二指腸へ到るまでに、アミラーゼなどで鎖が切断され、一糖類まで分解されます。そして最後に単糖のブドウ糖になって、腸から血液中に吸収されます。

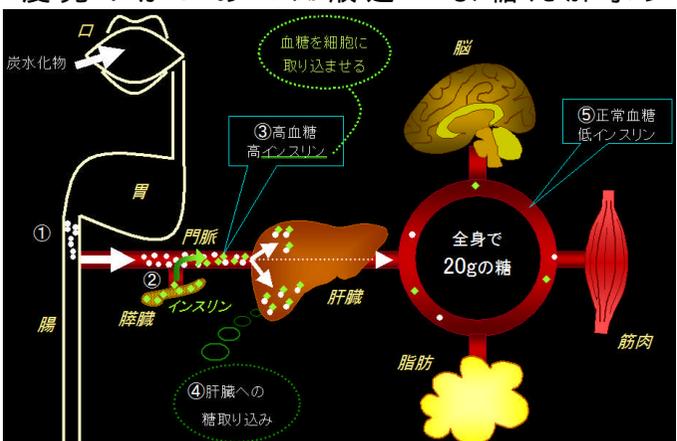
腸で吸収されたブドウ糖は全て門脈を通過して肝臓に流れ込むのですが、その途中にあるのが膵臓です。腸から膵臓までの間は、門脈にはブドウ糖の多い高血糖の血液が流れています。膵臓は常に少量のインスリンを放出している（これを基礎分泌といいます）のですが、血糖の上昇を感じて瞬時に必要量のインスリンを一気に門脈中に放出（これを追加分泌といいます）します。この機能が保たれていれば、その人は糖尿病になりません。日本人は、先天的にも後天的にも、この機能が損なわれやすく出来ているようです。

膵臓から肝臓までの門脈には、高血糖と（血糖に見合うだけの）高インスリンがカクテルされて流れています。ここで重要になるのが、インスリンの働きです。インスリンは、血糖を細胞に取り込ませる働きをします。大切なのは、細胞に取り込ませる」という点で、決して血糖を分解したり無くして

しまったりする訳ではありません。この働きをする物質は、体内でインスリンだけです。

インスリンと共に肝臓に流れ込んだ血糖は、インスリンの働きで肝臓の細胞に取り込まれます。そして必要な分だけエネルギーとして使われ、大部分はグリコーゲンや脂肪酸として肝臓の細胞内に蓄積されます。そして空腹が続いて脳や筋肉でブドウ糖の消費が進むと、膵臓から放出されるインスリンの基礎分泌が一定水準以下に低下し、肝臓の細胞は逆に蓄えを分解してブドウ糖を全身に供給します。

こうして肝臓を通り抜けた後の血液は、膵臓と肝臓の働きによって、食後であるうと空腹時であるうと常に 100mg/dL 前後の血糖値が保たれているし、インスリンも血糖に見合うだけの低い濃度になっています。



【プロフィール】
（いがぎ としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年先輩でした。濱さんは、とつても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松でヌクヌクしています。

濱の起業塾 四「機会」

社会事業を興す志を立てたなら、次は起業の種となる着想を得るための機会を創る必要がある。人によつては、着想とその機会が同時に訪れる場合もあるかも知れない。

機会の局面で、優れた着想を得るために異業種交流会や知識人との交流など、外部の先んずる人々との出逢いの場を積極的に活かすのは、勿論であるが、同時に見落としてはならないのが、内面の発掘である。

顕在化・文字化することで内なる資産の棚卸しをこの段階で行っておくことが、後々初心を忘れずに済むこととなる。起業に際しての内なる資産とは、「どのような自己実現欲求から立志したのか」というモチベーション系の資産と、これまでの自分の足取りを振り返って明らかにする「得意分野・知識」「興味の傾向」といった技能系と意識系の資産である。

これらを自伝風に記述するでもよし、箇条書きに

するでもよし、表現方法は問わず、自分が最も整理しやすく、客観的に挙げられる形で充分である。重要なのは、面倒くさがらずに書き出すこと。自分自身のことだから、つい「当たり前」と感じて面倒という感情が先に立ちやすいが、初心は忘れやすく、人の意識は、気づかずにしなっていく、いつの間にか曲がっているものでもある。今後に控える多忙な日々を迎えてしまうと、内なる資産を掘り起こしているヒマは無くなる。そうなるからではズレた羅針盤を戻す手立てを自ら放棄することになる。

人は、予期しない事態に遭遇した時ほどパニックに陥りやすい。つまり、「最大のリスクとは『それがリスクであること』を認知できないこと」である。社会的影響が大きいアクシデントに対して「想定外」は言い訳にはならない。責任は全て自分ひとりで負わねばならない。こつ考えると、内なる資産の明文化は、起業のリスク対策としての第一歩でもある。

外部人材・先達との出逢いを求める前に、内なる資産を把握しておくことを優先させて欲しい。人は、外部からの刺激に弱く、容易に変わるからである。

『おくのほそ道』は江戸時代初期に関東平野、奥州、北陸、そして美濃の大垣まで2,400kmという距離を駆け抜けた紀行文・句集として、恐らく日本で他に類をみないものであろう。

松尾芭蕉が門人の河合曾良と江戸深川の芭蕉庵から『おくのほそ道』の旅に出たのが1689年(元禄2年)3月27日(陽暦5月16日)であり、今年が330年に当たる。岐阜県大垣市の発案で芭蕉にゆかりのある14都県33市区町により実行委員会が組織され、4月3日には芭蕉生誕の地である三重県伊賀市の上野天神宮にて「俳聖」の火をとり、11月23日のゴールまでリレーが行われている。今年、これらの地で芭蕉や俳句に関する資料の展示、イベントなどが開催されている(例 福井県敦賀市博物館、「おくのほそ道330年の旅」9/13~10/20)。

以下、芭蕉・おくのほそ道の名前が冠についた記念館・資料館等について列記してみる。

- ・芭蕉・清風歴史資料館(山形県尾花沢市、1983~)
清風:芭蕉と曾良が鈴木清風の家で宿泊したことから。
- ・山寺芭蕉記念館(山形市、1989~)
- ・須賀川市芭蕉記念館(福島県須賀川市、1989~)
- ・江東区芭蕉記念館(東京都江東区、1981~)
江東区深川の芭蕉庵。おくのほそ道の起点。
- ・山中温泉芭蕉の館(石川県加賀市、建物は1905築~)
- ・芭蕉翁記念館(三重県伊賀市、1959~)
- ・奥の細道むすびの地記念館(岐阜県大垣市、2012~)
おくのほそ道の終点

以上、7ヶ所があることがわかった。冠に「芭蕉」「おくのほそ道」のない記念館、資料館等を含めると芭蕉関係の展示は相当な数に上るだろう。

「おくのほそ道」の北限は、秋田県にかほ市象潟(きさかた)であり、芭蕉が足を踏み込んだ秋田県唯一の地域である。当時の象潟は松島と同様に湾に松が茂った多数の島が浮かぶ九十九島の風光明媚な潟湖であった。潟湖は紀元前466年に鳥海山が山体崩壊を起し誕生したが、1804年に大地震により一気に海面が隆起し一晩にして陸地になってしまった。道の駅象潟からは九十九島全体を展望ができる。これらが国の史跡名勝天然記念物「象潟」に指定(1934)された。その模型がにかほ市象潟郷土資料館に展示され、この地域一帯は『鳥海山・飛鳥ジオパーク』にも登録されている。

北陸地方からは芭蕉と逆方向に日本海を「いなほ号」に乗って北上し、東北2位の高峰・鳥海山(2,236m)を眺めて象潟を訪れることをお勧めしたい。

固有名詞が「奥の細道」の場合、それに従った。

今年は冷夏か?と秋の新米の出来を心配していましたが、無事7月中に梅雨も明けてお日様燦燦と降り注ぐ暑い夏がやってきました。学生時代はもちろん事業を起こすまでは夏が待ち遠しく晩夏になるとどこか寂しい気持ちになるものでした。しかし、飲食店事業をはじめてからというもの、世間の人々が都市部から離れる機会の多い夏がうらめしく、早く冬がやってこいと願う寂しい人間になってしまいました(笑)。とはいえ、四季ごとに古来の習わしや祭事を楽しむのが日本人。そう以前の夏が大好きだった私にとって夏の風物詩と言えば、『能登のキリコ祭り』と『花火大会』です。でもその『花火大会』が各地で中止が相次いでいるようです。

理由は、警備費を筆頭に費用の高騰、企業からの寄付金の減少つまりは、赤字で継続できないということです。

に関しては、今年のラグビーW杯や来年の東京オリンピックなど大規模な警備を必要とするイベントが多少影響していると思われませんが、根本的な問題は『少子化』だと考えられます。各産業で人手が不足、定年の延長が行われ、学生の青田買いが行われている現在においては、警備会社も人の確保が難しく結果人件費が高騰するという構造です。私の大学時代で割のいいバイトと言えば警備でした。1日1万円というのはざらにあり、工事現場の仕事では天候によって3時間で1万円もらえた日もありました。でもそんないい条件のバイトには人が殺到し月に1度も入れず結局コンビニ夜勤や引越しバイトをするという団塊ジュニアのバイトあるあるです。

に関しては人の都市部流出や過疎化が要因の一つでしょうが、地方で多くの雇用を生み出している企業の多くは、大手企業のSCや工場、CSだったりするケースも多く、地域の祭事に積極的に関与してこないというのもあるかもしれません。

それでは今後日本の各地で開催されている『花火大会』が持続可能なモデルになるためにはどのような方策が考えられるでしょうか。

(1)個人からの寄付モデル導入

今年大阪の天満宮の花火大会では、クラウドファンディングが活用され300万円近くの寄付が集まったようです。ただ考えられる問題点として

・毎年安定した寄付が集められるか?

事業への投資ではないため飽きさせない還元メリットを毎年提供可能か。

・地方の集客数も規模も小さい花火大会では資金が集まりにくい。

が考えられるため資金調達の持続性や、どの花火大会でも活用できるというものではありません。(次号へつづく)

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』日中友好協会の旅「西安」2018.10.26~30
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

昨年のことである。小山町日中友好協会の旅行に参加するのは三回目だ。10月26日から30日までの今回のツアーは世界遺産を巡ることになっていて。世界遺産になると混み合いがちだが、団体旅行を企画する旅行社にとっては都合のいい制度と思う。なにせ間違いない。世界中からの来客に備えるよう今回の旅先である少林寺、龍門石窟、兵馬俑博物館、大雁塔は受け入れ設備もガイドも整っている。

これまで上海、海南島、アモイといった沿岸部しか行ったことがないので、内陸部にある少林寺拳法の本山、九つの王朝の都の洛陽でありシルクロードの出発点である西安を旅することが魅力であった。

成田を立ち上海を経由するのだが、ここでの待ち時間が7時間もある。プライオリティパスで入ることができたラウンジには、アルコールは無く食欲を感じない軽食が並ぶ、しょぼすぎた。鄭州空港に着き、そこからバスに乗りホテルに着いた頃には日が回っていた。

旅の二日目は世界遺産のすうざん嵩山少林寺。インドから中国に渡来した達磨による禅の発祥の地と伝えられ、中国禅の名刹である。また少林武術の中心地としても世界的に有名。なお、少林寺拳法は昭和11年に嵩山少林寺にて、北少林義和門拳を継承した宗道臣が日本で創始したものであり別物とのこと。名刹の色よりも、物販・観光・カンフーショーなどの商業活動が色濃くなっている。行き過ぎた観光化が、地域の本質を薄っぺらな商業主義で覆ってしまい、すぐに飽きられ閑古鳥が鳴いた日本のいくつかの観光地の二の舞にはならぬことを願ってやまない。

旅に出て三日目は中国三大石窟のひとつ龍門石窟。こちらも世界遺産、写真で見た記憶があるが、実物を目にして人類の偉業に圧倒された。

龍門石窟が開屈されたのは、北魏時代(386~534年)のことだ。北魏の皇帝、孝文帝が大同から洛陽に遷都してからの494年から石窟内の仏像制作が始まり、その後約400年、唐代初期まで続くことになった。ただ、中国では文化大革命(1966~1976年)により仏教は否定され、龍門石窟の多くの仏像も破壊されたとのことであるが、それでも十分に残っている。

その数は、石窟が約2,100、仏像が10万體以上にもなるといわれている。遠くから見渡してみると、まるで穴ぼこだらけの岩山といった感があるが、大仏の「廬舎那仏」は存在感を放っている。その高さは17.14mもある。日本人は見かけなかったが、中国人



観光客で十分に埋め尽くされている。

お釈迦様のごとく座る石製のハスの台座が用意されていて感心した。代わる代わる着座し写真を撮っていた。こんな遊び心が欲しい。日本にも顔ハメ看板があるが、インスタ映えを狙うなら次の手が欲しい。

この後、中国版新幹線に乗り西安市内に向かう。パスポートの掲出、危険物の持ち込みもあり日本の新幹線という訳にはいかない。ハルピン-大連で乗ったビジネスクラス以来二回目だ。今回はエコノミークラスだけだ。

新幹線駅周辺は新規に整然とした都市開発が行われていた。中国の新規都市開発には常に驚かされる、そのスピードと少し嫉妬する質の高さに。

そして西安の街にも相当に驚いた。上海に見る近未来的都市づくりに比べ、唐の都があった歴史がベースにある街は違う。

特に城壁に圧倒される。現存するのは1770年頃に建設された明時代のものだ。13.74キロメートル、高さ12メートルあり、上部に上がって1周する事ができる。自転車で走っている姿を多く目にした。城壁にある門部の夜のライトアップも照らし方、光量、色も申し分ない。

西安観光と言えば兵馬俑は欠かせない。シルクロードの起点であるとともに、古代中国の諸王朝が都を置いたことから、旧跡が豊富にあるが、なかでも、始皇帝陵と数千体の等身大のとうよう陶俑(陶製の人間や動物を模した副葬品)が出土した兵馬俑坑は素晴らしい。

これは紀元前221年に中国初の統一国家である秦を建てた始皇帝の陵墓である。多くの囚人や職人を動員し約40年かけて完成したとされる。この陵は内外二重の城壁に囲まれており、全体は東向きの配置であった。敷地内には墳丘のほか、神殿や祭祀施設があった。

始皇帝陵の東側1.5kmにある兵馬俑坑は、兵士や軍馬をかたどった陶製の像で、始皇帝の死後の生活を守るために遺体とともに埋葬されたとされる。写実的につくられた兵士俑の高さは180cm前後で、ひとつひとつ表情や髪型、服装が異なる。当時は赤や緑などの彩色が施されていたが、現在は剥落している。欠けた兵馬俑は一つずつ丁寧に復原作業が続いている。終わる果てもない気絶するほど永い作業になっている。

中国のほんまもんの歴史に多数触れることができた今回の旅の満足度は、これまでに増して高かった。中国は広く、奥が深い。今年も2回の旅を予定している。お楽しみは続く。(了)

